

障害と共に生きる

高三

僕は幼稚園の頃に上手く歩くことができなくなりました。小学校低学年になると介助が必要となり、次第に車イスを利用することが多くなりました。それでも僕は樂觀的でした。今は歩くことは大変だけどリハビリも頑張ってるからいずれ病気は良くなるだろうし、皆から「車イスかつこいいね。」とか言われて悪い気はしないし……。卒業までには歩けるようになって、体育で思いっきり走ればいいかな、と思っていました。

しかし小学校高学年になっても変わらない現状に、僕は気づいてしまったのです。もう立つことが出来ないのではないかと。僕は両親に質問してみました。それまであまり知らなかった、知ろうとしなかった自分の病気について、向き合えばならないと思ったからです。病気は進行性のもので、身体が徐々に動かしづらくなるというものでした。僕はその時、障害というものはつきり

意識したのだと思います。

そして、僕は小学校を卒業し一般の中学へ進みました。中学校は予想以上にハードで、家に帰っても授業中書ききれなかったノートの書きとりに追われ十分休むことができず、学校を休むことも増えました。友達も小学校時代からの親しい友達だけで、中学校では新たに作ることはできませんでした。

そうした生活を送るうちに卒業となり、選んだ高校は特別支援学校。一般の高校は、バリアフリーでなかったもので、中学より忙しくなる高校で単位をきちんととることが難しいということ諦めました。今まで一般校で中学まで来た僕がこの特別支援学校でやっていけるのだろうか。僕は不安も抱えつつ入学をしました。その不安は早々に消え去りました。ここでは僕のように障害を背負った生徒ばかりなので、もちろんバリアフリーで、授業の合間にしっかりと休む時間があったり、帰りの他の学校より早く、十分家で休息がとれたり……。そして一番驚いたのは特別支援学校に入ってから、学校を休む日が数えられる程度にまで減っ

たことです。

自分でもわかるくらいの変化に僕は、それだけ
中学校時代は無理をしていたのだとわかりました。
消極的だった中学校時代とは打って変わり積極的
になることができ、何事にも挑戦するようになり
ました。入学を機に環境も変わり、改めて自分を
見つめ直すことができたことが大きいと思います。
両親から病気のことを聞かされた時に受け入れた
つもりでしたが、本当のところは今までできてい
たことが次第にできなくなることが怖くて障害か
ら目を背けていました。しかし、それでは状況は
変わらない。障害と向き合うことで活路を見出す
ことができます。やがてその活路は将来への道筋
になっていくのではないのでしょうか。僕は障害が
あるが故にできることは限られるかもしれませんが、
これが故には逆にできることに集中して取り組
もうという気持ちになりました。障害者、健常者
を問わず、気持ちの持ち方で楽しい人生を送るこ
とができるのではないかと思います。

